

町長日誌 No.201



町長日誌の第 201 号です。町長が日頃町民の皆さんと話し合ったことや色々な出来事を町長自ら書いたものです。町民皆さんのご意見・ご要望・ご感想をお待ちしています。

7月14日(火) 16:00

午前 10 時から三密を避け限られた人数の下「戦没者追悼式」を行いました。今年で第二次世界大戦終了から 75 年が経過しました。昭和・平成そして令和へと時代は移りました。昭和でいえば 95 年となります。私も最近この昭和に置き換えてから年齢などを考えます。子供たちや平成以降の世代の多くは西暦で考えるようで、こんなところにも時代を感じる今日この頃です。式辞の中で、アメリカを中心に巻き起こっている人種差別反対の運動についても触れました。アメリカはアフリカからの奴隷制度により発展しましたが、南北戦争を経てリンカーン大統領が奴隷開放を行ったものの、未だに白人の黒人への差別は無くなっていないのです。今月 12 日に白老で「ウポポイ」(民族共生象徴空間)としてアイヌ民族博物館が遅れに遅れてオープンしましたが、北海道の開拓の歴史は先住民であるアイヌなどの人々から土地を奪い、安い労働力としての差別が横行した歴史でもあり、決してアメリカの黒人差別と変わらないのです。ただ、国が同化政策をとったため純粋なアイヌ人はとても少なくなり一般的に知られなくなっただけなのです。古い話ですが、高田屋嘉兵衛と言う豪商が江戸時代後期に当時の北海道を中心に活躍しました。淡路島で生まれ函館に廻船商として進出した嘉兵衛は国後島・択捉島間の航路を開拓し漁場運営と廻船業で巨額の財を築いた人で、今の函館の基礎を造ったとも言える人でしたが、この嘉兵衛は決してアイヌの人々を差別せず、和人と同等に賃金を払い、保存食の作り方を教えたりしてアイヌの人々から慕われていたそうです。現在、オ

ホーツク沿岸の漁協ではホタテの乾燥貝柱を製造し中国に輸出をしています。嘉兵衛がいた時代は天然ホタテが無尽蔵にあり、波打ち際で幾らでも採れていた貝を乾燥貝柱にと最初に考えたのが嘉兵衛であると言われています。しかし、嘉兵衛はロシアとの問題に巻き込まれ二代目で高田屋は没落してしまうのですが、当時の北海道は毛皮・海産物・油・肥料と宝の山で、松前藩や様々な商人が労働力としてアイヌを虐げ続けたのですが、その中であって高田屋嘉兵衛は稀有な存在であったようです。ちなみに、嘉兵衛の後に松前藩御用達となり網走や紋別などの道内主要港を漁港として整備したのが「又十藤野」でした。明治 22 年沙留に和人として初めて越冬した金沢岩松は今で言えば藤野紋別支店沙留漁場の支配人で同じく越冬した垣下若松は船頭長でした。この二人が越冬したのを興部の始まりとして今日があるのです。そして、この又十藤野で活躍した人の中に高田源蔵がいます。前段の嘉兵衛とは無関係です。当時タラの漁場で邪魔物であった大きなカニを「タラバガニ」と名付け、焼き干しにして中国に輸出、さらには高田屋嘉兵衛が取り組もうとしていた天然ホタテの乾燥貝柱を商品として中国へ輸出することを始めたのもこの高田源蔵であったと言われています。

追悼式の話から脱線してしまいましたが、産業の発展や町の発展の陰には必ず負の歴史があります。興部町には 168 人の戦死者が居ます。また、開拓に入り子供を病で失った人や経営を断念した人は数限りないほど居て今の興部町があるのです。町はこのような事の繰り返しの中から成長や衰退を選ぶ生き物のような存在かもしれませんね。

今回は、戦没者追悼式の話から北海道の歴史を書いてみました。前回の日誌が 200 回となりましたが、町民の方からお手紙を頂きました。「世の中がどう変われ、住み馴れたところが一番です。生まれ育った地で最期を迎えたいものと念願している一人です。「町長日誌」を書きつづけ私達にも元気を与えてください。」との内容でした。こちらこそ元気づけられましたよ！お手紙、ありがとうございます。これからも様々な出来事や皆様からのご意見、私の思いなどを書きつづけたいと思います。では、また。

お便りをいただく場合は、適当な便箋等を封筒など(使い古しのもので構いません)に入れ、封をして、町役場窓口か、お知り合いの町職員にお渡し願います。町長のみ開封とし、お返事をさせていただきます。不明な点は、総務課総務厚生係まで。TEL 82・2131です。

